

陳舜臣さんを語る会通信

NO.79

Aug. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年8月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

長編推理小説12作目『影は崩れた』、13作目『濁った航跡』

本号では、長編推理小説12作目『影は崩れた』（書き下ろし 1966 読売新聞社）と13作目『濁った航跡』（書き下ろし 新事件小説全集4 1968 読売新聞社）を取り上げました。（編集委員 橘雄三）

『影は崩れた』人物紹介ほか

徳間文庫版のキャッチコピーをもとに

三年間のバンコック

駐在から帰国した太平産業社員深尾を待っていたのは山根会長の怪死だった。会長の愛人悠子はかつて深尾の恋人だったが、事件の解明がないかぎり会長との悪縁が切れないと深尾に訴えた。

漁師からたたきあげた山根会長の過去には暗い出来事があった。そして、昔の漁師仲間が次々、変死していた。

人間心理の綾をタテ系に、アリの崩しをヨコ系に展開する本格推理長編

主な登場人物

●山根寛一 兵庫県西南部、播磨灘に面したH町の出身。漁師上がり。太平産業を創業、前社長。本社が大阪から東京に移ったのを機に会長に退く。十二年前、漁師の娘だった妻を捨て、会社の事務員・路子と結婚。糟糠の妻は憤死



山根寛一の出身地 H町イメージ

●深尾尚作 太平産業社員。山根寛一が社長の時、三年間、社長秘書をしたことがある。その時期に好意を寄せていたタピストの安部悠子を秘書に推薦。のち、ほぞを噛むことに。その後三年間、バン

コックに駐在。本社に転勤になり、東京に戻ったところからストーリーは始まる。キャッチコピーに言う「人間心理の綾をタテ系に」のタテ系から事件を追う

●安部悠子 太平産業社長秘書から山根寛一の愛人に。両親を亡くし、細腕一つで弟を養っていた。弟は、ちょうど、高校を出て大学（医学部）に入るときだった。悠子は、深尾より、五十に近い山根を選んだ。芦屋のマンションに住む

●里見老人 里見隆夫。昔、外国航路の船長。六甲山に別荘を建てたのは三年前。山根寛一の別荘（名義は安部悠子）の隣家の住人。心臓病が重く寝ていることが多い。山根寛一とは犬猿の仲だった。「気味がわるい」「地獄の使いみたい」（悠子の弁）

●お啓さん 前森啓子。里見家の家政婦

●平林重助 太平産業社員。山根の漁師時代の仲間。不相応な高給を受けていた。五年前、宿直の晩に服毒自殺

●塩田佐吉 太平産業倉庫番。山根の漁師時代の仲間。不相応な高給を受けていた。四年前、倉庫に賊が侵入、殺される

●香川奈津子 生まれは四国の松山。両親を早くに亡くし、親戚のあいだをたらいまわしにされて育つ。二年前、神戸のアパート・清雲荘で服毒自殺。当時、バー、ゴールデンライトのホステス

●望月透 東南汽船のチモール丸一等航海士。里見老人の娘婿。望月の妻、つまり、里見の娘は十年ほど前に死んでいる。亡妻との間に男の子がいたが、満四つになる直前に死去。独り身。神経性胃炎を病み、里見老人の別荘で療養中

●浅野警部 兵庫県警捜査一課の警部。キャッチコピーに言う「アリの崩しをヨコ系に」のヨコ系から事件を追う

■広島県漁業取締官佐藤基殺害事件 昭和二十四年八月に起こったこの事件の調査で山根寛一殺害事件の解明は大きく進展する

作中時間 ■佐藤基殺害事件の時効が昭和三十九年ということが謎解きに絡む。作中、「一昨年、〇〇はやっと宿願をはたして海外旅行に出かけたのである」と、昭和三十九年を一昨年とする記述があるので、作中時間は一九六六年とわかる。これは、同著刊行の年でもある。



読売新聞社版表紙

徳間文庫版『影は崩れた』 伴野朗氏「解説」より抜粋転載 ほか

『影は崩れた』

伴野朗氏「解説―陳舜臣さんと私」より

小見出し、及び傍線は編集委員

『影は崩れた』巻末「解説」なのに、同著について、全くふれられていない。詐欺だ！ほんとに本を読んだのか？「陳舜臣さんと私」という副題を付けてはいるが……。しかし、興味深い記述があるので、その箇所を抜粋転載します。

一九七三年当時の陳さん宅

当時、伴野朗氏は朝日新聞の記者だった。

陳さんに初めてお目にかかったのは、四十八年春である。取材の一環で、陳さんにお会いしたのである。

六甲山系にある見晴らしの

よい伯母の山の陳家を訪れた時のことは、いまもよく覚えている。焼き物で仕上げた「陳舜臣」という表札が、いかにも著名な作家にふさわしく思われた。中国式の装飾品や調度で統一された応接間、…。(画像は現在の旧陳舜臣邸)

一作も推理小説が書けなかった一九七九年

一昨年(一九七九年)、新聞社の企画として玄奘三蔵の天竺への求法の足跡を訪ねる『天竺への道』の取材で、陳さんご一家と西域、インドを四十日ほど旅行する機会があった。陳さんは、ゆっくりグラスを口へ運びながら



いった。

「ことは、とうとう推理小説が書けなかった。すこし書かないと、やっぱり(推理小説が)書きたくなるね」

陳さんは、照れたような笑い顔になった。

陳さんは、やはり推理小説がお好きなのだ。なぜか、嬉しくなってきた。西域ものや歴史

関係の仕事が続き、推理小説まで手がまわらないことは、薄々知っていた。仕方がないとは思いますが、残念だな、と考えていた。それだけに、陳さんご自身の口から「推理小説を書きたい」と聞いた時は、無性に嬉しくなったのだ。

『割れる』ネーミングのいきさつ

陳さん、小説のネーミングで、苦労しませんか？

と、不躰にも私。

「頭を悩ますときがあるね。ある出版社から推理ものの書き下しを頼まれてね。題を早く決めてくれというんですね。推理小説だから最後には、”割れる”に決まっている。そこで『割れる』という題にした。これならどんな内容のものにも合うしね」

(補足 ■『割れる』は一九六二年、早川書房から出版された。陶展文もの一作)

一九八一年六月



徳間文庫版表紙

似たような表現が他の作品にもあることは、よくあることなのではないでしょうか？

額にしるしのついた女

『影は崩れた』に次のような描写があります。

四年まえのある夜、望月は何軒もバーの梯子をして、ゴールデンドライイトにはいった。そこで彼は香川奈津子を見て、心を惹かれた。

——額に他人にはみえないしるしのついた女だった。

と、望月は文学的な表現をした。

おなじしるしをつけている人間にだけ、それが見えるのだそうだ。

「灰色の世界に沈められた者同士、それがわかるのです」

妻子を失った孤独な男と、暗い不幸な過去をもつ女とは、相手の顔に仲間のしるしを認め合うことができるのかもしれない。(徳間文庫版 p.122)

『幻の百花双瞳』『神に許しを』にも似たような箇所があります。引用します。

人間の額には、限られた少数の同類にしか見えない烙印が捺されているのだ。イネスはサルマナザールの額に、それらしい烙印を認めた。聖職についているが、イネスはベテン師の才能をもっていった。ベテン師にはベテン師がわかったのである。(徳間文庫版 p.206)

右の記述は、旧約聖書の「カインのしるし」を連想させます。『影は崩れた』は一九六六年の書き下ろし出版で、『幻の百花双瞳』『神に許しを』は一九六九年の初出執筆なので、後先で言えば、『影は崩れた』の方が先ということになります。

『濁った航跡』 登場人物ほか

『濁った航跡』 主な登場人物

● 桃井卓也 主人公。三十歳を過ぎたばかり。父の事業が順調だったので、大学を出てアメリカに留学。その後、貿易商社に就職。加賀久雄とは、高校時代同じクラスだった。卒業後、十年して再会。加賀の描いた『仕事』の片棒を担ぐことに。喫茶店のレジで、財布を忘れ困っていたので、代ってコピー代を支払ったことから小竹輝子と親しくなる。

● 加賀久雄 桃井の高校時代のクラスメート。大学を出て以来、定職に就いたことがない。この度、桃井と再会。二人がはじめた『仕事』は、「ひろい意味でのポン引き」、「女性の輸出と回収」だった。莫大な資産を持ち女遊びが好きそうな外人に、純情そうな日本女性を近づける。「女はトリモチ」。愛人となった女を男の国に「輸出」、いっぱい金をくっつけてから「回収」、くっついていて金の二割を頂戴する。

● 宮沢誠 ブルーフィルムの制作を仕事とする。この仕事で、加賀とも関係が

■ 加賀、桃井、宮沢が、銀座のバー、スリー・キャッツで、『仕事』の話をしているとところからストーリーは始まる。「桃井は加賀や宮沢といっしょにしていると、ドブのおいがからだにしみこむような気がし」、「『仕事』」、「醜」業から足を洗いたいと思うようになっていく。

本作品は十の章からなるが、第一章の最後で最初の殺人事件が起きる

● 小竹輝子 デザイナー学校で学ぶため宮崎から上京。桃井のマンションの近くのアパートに住む。二十七、八歳。桃井と、喫茶店での出会い以降、親しくなる

● 稲葉喜美 銀座のバー、スリー・キャッツのマダム。加賀・桃井の『仕事』で「回収」された女性。その金で今の店を持つ

● 柴村克子 もと、銀座のバーのホステス。加賀・桃井と契約、リヤオ・ミン・ツォンの愛人となりペナンの別荘で暮らす。契約違反を承知で、「心のやすらぎ」が得られ、日本に帰りたくないという。

「輸出」はしたが「回収」失敗のケース

● リヤオ・ミン・ツォン マレーシアの首都クアラルンプールを本拠とする華僑系の富豪。マレーシアの倉庫王といわれる。ペナンに別荘を持つ

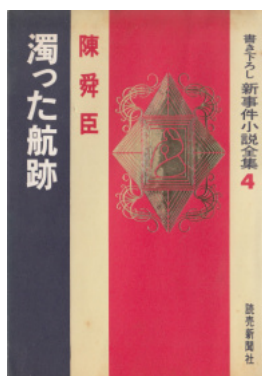
● 根本茂子 バー、ゴールデン・シーのホステス。タイ国政府高官パーホンの愛人となり、『仕事』で「輸出・回収」された女性。それを資金に出店準備中

● パーホン オックフォード大を出たタイ国政府高官。バンコク屈指の富豪

● 橋詰良江 『仕事』で、フィリピンの有力政商サルセドの愛人となり「輸出」され、心身ともに病むが「回収」までこぎ着ける。そんな中、持ち帰った金はヒモにだまされ元の木阿弥に。病気だけが残る

● サルセド フィリピンの有力政商。サデイス・ト・堀光彦 シンガポールやバンコクで活動する地下銀行業者。『仕事』の「回収」の手伝いをする。なんでも笑いとばしてしまう太い神経の持主。悪人ではない

● 前島 警視庁の警部。桃井の高校時代のクラスメイト。サッカーク部の仲間。仕事をこえて事件に絡む



読売新聞社版表紙

希少本『濁った航跡』

陳舜臣さんの本は、最初に出版されたあと、別の出版社から出版されたり、文庫本化されたりして、次々、息長く出版されてきた。しかし、現在は、そのほとんどが絶版で、古本市場でしか手に入らないが。

そんな中でも、『濁った航跡』は書き下ろしで、一九六八年に読売新聞社から新事件小説全集4として出版されたもの以外に見あたらず、希少本といえる。

古本のネット市場でも『濁った航跡』は一種類で、点数も少なく高い。私(橋)も、二千七百四十円で買った。通常、古本市場で、数百円で買える陳舜臣さんの本にしては高い。

陳作品にはめずらしい描写

こんな場面がある。結婚詐欺に騙された女性が、新婚旅行といって、香港のブルーフィルムの撮影現場に連れ込まれ、陵辱シーンを実写(演技ではない)されるという場面が詳述される。もう一箇所、これは、俳優の演技であるが、ブルーフィルムの撮影現場の記述がある。

陳舜臣さんの作品で、他にこのような描写のある作品は記憶にない。当時の紙誌で、このような描写が歓迎されるといふ風潮があったようだが、陳さんがそれに迎合したとは思えない。作品の主題上、これらは必須のシーンだったのか？

(2002 PHPエル新書版)『沖縄の歴史と旅』『戦場の県知事 島田勲さん』

陳舜臣著『沖縄の歴史と旅』

もくじ

琉球の歴史

一 伝説時代の琉球

二 三山時代の琉球

三 琉球王国の興隆

四 近世琉球への転換

五 「沖縄県」の誕生

六 今あらためて沖縄を考える

沖縄にももう

もてなしの場 伊東忠太博士のこと

沖縄学の父・伊波普猷 グスクの話

柳田国男の『海上の道』

牧志公設市場と国際通り

豚料理と泡盛

亀甲墓と沖縄の宗教

聖地斎場御嶽と久高島

崇元寺と冊封使

首里城 海が見える丘

壺屋転々

二人の巨人 程順則と蔡温

柳宗悦の沖縄方言擁護論

石敢当 沖縄の祈り 万座毛

なつかしさの表現

石垣島 唐人墓と島人の心

糸満の謎 日本唯一の海洋漁労の民

宮古島 オートリという宴

移民の島からハワイへ、中南米へ

戦場の県知事 島田勲さん

対談 歴史小説『琉球の風』の世界



『戦場の県知事 島田勲さん』

「戦場の県知事 島田勲さん」

は、新書版で

六頁の短い随筆です。この

作品は、兵庫県の中学、高校で使用する

平和・道徳教育副読本『心かがやく』にも収録されています。



■島田勲 1901年、神戸市須磨区生まれ。旧制神戸二中(現兵庫高)卒業後、三高を経て東京帝国大(現東京大)へ入学。旧内務省に入省し、各地の警察部長、大阪府内政部長などを歴任。



45年1月、最後の官選知事として沖縄へ赴任。6月末に消息を絶った。享年45歳。

『戦場の県知事 島田勲さん』抜粋転載

沖縄戦で忘れられない人がいる。

忘れてはいけない人かもしれない。

その人の名は島田勲という。戦前最後の沖縄県知事である。その生き方に頭がさがるのだ。

平和な時代であれば、南国の、心やさしい人たちが住むエキゾチックな沖縄に島田勲さんは心はずむ思いで赴任したはずだ。

しかし、時代が悪かった。一九四五年一月の沖縄は、その千年の歴史のなかでもっとも凶悪な明日を確実に予感させていた。ましてや島田勲さんは戦況の情報を的確に入手できる立場の内務官僚である。沖縄戦の現状も、今後の展開も決して楽観できるものでないことは手にとるように理解していたはずだ。さらに言えば、沖縄戦が「本土決戦を避けるための捨て石」であり、日本の戦闘態勢立て直しまでの「時間稼ぎの玉砕地」であることも知っていただろう。

前任者の泉守紀知事がなぜ在職途中で県知事の椅子から降りたか。その事情も当然、島田勲さんの耳には入っていた。前知事は戦況のさらなる悪化を見越し、出張の名目で沖縄を離れ、ついに帰任しなかった。知事の候補に名前があがった官僚たちはみんな沖縄行きを断っていた。島田さんは、仲間に、そして家族に、こういう残して沖縄に乗り込んだ。

「俺は死にたくないから、だれか替わりに行って、死ぬ、とはいえない」

戦後、島田勲さんの遺族は生活に困窮し、魚の干物の行商もしていたという。そのころの日本ではどこでも見られた普通の風景だったが、島田勲さんの遺族と知ってわざわざ買っていく人もいたそう。

映画『島守の塔』紹介

戦後、アメリカの施政権下にあった沖縄が、1972年に復帰して50年になる。節目の年ということもあって、沖縄関係のテレビ番組や新聞記事が目につく。

7月22日には、太平洋戦争末期の沖縄を舞台に命や平和の尊さを描いた戦争ドラマ『島守の塔』が封切られた。映画のキャスト並びに内容を略述します。

激しい空襲や艦砲射撃、そして上陸戦により、約二〇万人が犠牲となった太平洋戦争末期の沖縄戦。絶望の淵に立たされながらも「命こそ宝」と訴え、後世に希望を託した2人の人物、戦中最後の沖縄県知事・島田勲(萩原聖人)と職務を超えて県民を守るべく奔走した警察部長・荒井退造(村上淳)、そして、戦争に翻弄される沖縄の人びとの姿を描き出す。

